

文化団体等ヒアリング結果

ヒアリング調査実施概要

《調査目的》

文化芸術に携わる市民のニーズを把握し、具体の施策の検討に生かすこと

《調査時期》

令和5年7月

《協力をいただいた文化団体等》

以下「ヒアリング実施団体」のとおり

現代アート関連の文化団体(個人)へのヒアリング

市内で活動している現代アート関連の文化団体(個人)に対し、市の文化施策に求めることや、活動に際しての課題などについてヒアリングを行った。ヒアリングの実施団体、主なご意見は以下のとおり。

【ヒアリング実施団体(個人)】

アートNPO関係者

【主なご意見】

- ①公文協から国へ向けた「劇場、音楽堂等における指定管理者制度運用への提言」(2023. 6. 15)になるほどと思うことが記載されている。骨子案に取り入れたらどうか。
- ②文化芸術関係者の労働環境の整備が必要。行政の予算削減が大きくなりすぎて、補助金や委託を受けても結局持ち出し分が増える。雇用者側もそれに引きずられて予算を削ることになり、非正規雇用が増えている。
- ③人を大事にすることを中心に置いた計画にしてほしい。事業中心になっている。関わる人を第一に考えた計画にしてほしい。(日本は事業に対する助成、ヨーロッパは運営全体を考えた助成という考え。)
- ④アーティストが仙台で暮らせることを考えてほしいが、アーティストももっと声をあげるべき。
- ⑤(芸術関係などは)その分野の能力が必要な職種であるが、専門性を捉えた予算確保が考えられていない。
- ⑥文化芸術関係における予算配分の考え方が本当に今のままでよいのか検討すべき。仙台市は劇都、楽都と言われるが、楽都との差がありすぎる。メディアテーク(アート)も同様。
- ⑦今回策定する計画は、未来の理想を含めた計画にしてもよいと思う。
- ⑧「懇話会の資料を読む会」をつくり、八百屋のおっちゃんにもわかってもらいたいと思って議事録などを読む活動をしているが、資料に使われている言葉が難しすぎて頭に入りづらい。(行政だけがやるのではなく、役割分担できるものは民間人も担い、一緒に作っていきたいと思って活動している。)
- ⑨今の計画を作りながら、次期計画の準備をしっかりとしたほうがよい。(計画期間中に平行し

て次の計画の仕組み作りをしておく)

- ⑩世間一般的なこともかもしれないが、最近は何でもクレームが来ないように収めようとする向きがある。それだと冒険ができなくなる。チャレンジしたい(できるようにしたい)。
- ⑪仙台市の立ち位置について、仙台市のことだけを考えるのではなく、東北・宮城のことも考えるべき(東北各地から仙台に来た人が、地元に戻って何か開催できるような支援をするとか。)

【ヒアリング実施団体(個人)】

現代アート ディレクター、キュレーター

【主なご意見】

- ①アートはそもそも「個」の活動であるため、「アートの団体」は成立しづらい。地方都市は特に。
- ②現代美術をやる人が少ない。世界的にみると現代美術のマーケットはあるが、日本を見たときにマーケット自体が小さい。
- ③近年、ビエンナーレ・トリエンナーレなどの国際展が開催されるようになり、税金が投入されるようになった。まちのブランディングやアートが持っている力が地域社会に重要だと思う人がいたから、そういったものにつながり成功した。仙台市が文化政策的にビエンナーレ等をやっていくという気持ちがあるのなら今回作るこの計画も当然、同時代を生きている現代アートを重要視していくことが必要。
- ④仙台には何の特色もない。仙台が好きなお客の意見は「プロスポーツやオーケストラもあってホールもある」という言い方をされる方が多いと思うが、それが特色かといわれたら、大都市にあるものをミニチュア化したようにしか思えない。
- ⑤東京が近いので、東京に流れてしまう。
- ⑥残念ながら古いものも戦争で焼失し残っていないため土地のローカリティのようなものを出しづらい。
- ⑦ここ数十年のイメージだと仙台市は広く浅くお金を配るのが得意である印象。文化に対しても、一般の方たちの活動支援が多くそれが特色かもしれない反面、「本物」であるとか「課題意識を持たせるようなもの」「刺さってくるようなもの」がなく、本気のプロフェッショナルを育てるような環境はなかった印象。すごいものを見るという経験も学びになると思うが、商業的な面に任せてきてしまったのではないかと。
- ⑧人材を育てる場所がない。(美術)大学がないのが一番大きい。理系ばかりで文系の方たちはなかなか表に出る機会がなく、アートの不毛地帯となってしまった状況では。
- ⑨東北でも他県では若いアーティストや交流が生まれているが、仙台は通過点にされている感じがする。
- ⑩いっそ田舎だと自治体しか大きな予算を持っていないので、公共施設がまともな企画展示に予算をつけているケースがある。メディアテークは予算が少ないと思う。大きな予算をつけることで、人を呼ぶ・仕事生まれる・そこで人が育つ…と発展していく。文化ポリシー云々よりメディアテークに大きな予算をつけることで解決することもあるのでは。
- ⑪アート関連の事業は、民間企業が頑張っているが、小さく弱い民間企業しかいない状況。もう少し中堅の企業があればまた違うと思うが、公共でも大きな事業がないとなるとやはり活動は厳しい。
- ⑫企業と仕事をする際に感じているが、分かりやすくやりやすいブランディングばかりに偏っている傾向にある。そういった仕事に現代美術のアーティストを紹介したりするが、企業とアーティストの隔たりもあり調整が必要なお客が多い。正直企業はブランディングできれば

なんでもよかったりする。ただそのブランディングは、パッと見分かりやすいものに予算が付きやすく、行政側もそういった側面があるのかもしれない。

- ⑬ 分かりやすい方に偏ることで、このままでは本当の根本にある価値観や社会課題、そもそも何が問題なのか？を考えると作品をつくる現代美術のアーティストがいなくなってしまうのではないかと危惧している。本当に社会課題等を考えて良い作品を作っているアーティストが、妥協しないとイケない。
- ⑭ 企業等の要求をクリアすれば何をしてもいい、ではなく、難しいかもしれないが最初からお互いが理解していい形で進めていければいい。行政でなくてもいいが、世の中が「見た目でもわかりやすいものでしかブランディングできない」という考えから、アートをちゃんとやっていくことでブランディングになると理解してくれればいいのだが。
- ⑮ 今、国の政策的にも、「文化・アート」といっても、共生社会、教育・福祉、国際交流に「役立つ」ものを求められる流れになっており、この流れはもはや変えられないのでは。流れの中で、「求められるものをクリアし自分のやりたい表現もクリアする」必要があり、やる側の問題でもあるし、そういった企画書を書ける人間がいるかという話でもある。
- ⑯ 京都市のやっていた事業で、アーティストと企業をマッチングさせる事業があった。いわゆるアート思考というもので、企業側がアーティストの考え方・思考回路・表現を用いることで新たな気づきになるという取組。結果的に企業側は社員のやる気が向上・本業で経験しえない体験をすることでアートの必要性を理解することができ、アーティスト側も、実現のための手段の幅が広がるなど win-win の関係の取組であった。こういった取組があれば、前述の懸念はなくなり、むしろアートの必要性について皆が理解し取り組めるのではないかと思うが、そのためには企業・アーティストどちらもよく理解したコーディネーターが必要。
- ⑰ 仙台はコーディネーター/ディレクターが少ない印象。事業が少なくお金が動いていないということが、コーディネーター等が少ないことにつながっている。
- ⑱ 事業がたくさんあれば、いろいろな人にチャンスが巡るが、それをやれる企業・美術館が仙台にない。
- ⑲ アーティストは自分で価値をつけられない。どこかで展覧会を常開催する等の実績＝専門筋による価値づけがなされていることで企業側と事業するときスムーズになる。
- ⑳ 地域企業と地元アーティストによる長期にわたる取組で地域の活性化につながった例がある。(別府)
- ㉑ 人口 20 万人程度の都市規模だとアーティストや企業等顔が見える関係が築きやすいが、仙台市くらいになると顔が見えない。
- ㉒ 仙台の力がある方々のなかで、いま現代アートに興味関心のある方がいない。→美大・美術館がないため、その感覚を幼少期から蓄積されていない。
- ㉓ 地場産業も、作るという産業がとても少ない。サービス業メインの印象。そのため、どの分野（工芸含む）においても、作ることへのリスペクトが低い。そういったまちではアートへの理解は育まれにくい。
- ㉔ アーティストが相談したり意見交換をしたりできる場所が各方面にあればいい。アートの相談所（京都）でやっていたものが思いのほか重要であった。相談の中に、次の施策につながるものがあると気づいたということがあった。メディアテークにも相談所があるが、メディアテークで何かするための相談と思いがちのようだ。
- ㉕ 若者が少なくなってきた昨今、普通の暮らしをしていたら、若い世代に会う機会がなく、世代が分断していると感じる。
- ㉖ 杉村美術館（塩竈）での取組（公募・審査で地元ゆかりのアーティスト 2 名選出、選出した 2 名は 1 年かけて地元をリサーチし新作をつくる）が良い。アーカイブ化もでき、予算的には審査員、製作費、交通費くらいでは、少ない予算でも大きくアウトリーチできるものがあるはずだが、そういったものがまだまだ起きていない印象。

- ⑳ 常々、作品を作れる場所があったらと思っている。協働で制作する場所や相談の場所が必要大きな展示の場所があっても、そこに展示するための作品制作が個人のアトリエではできないことが多い。
- ㉑ 東京等であれば美大卒の人が集まってアトリエを作るということがあるが、仙台ではそういった環境がない。
- ㉒ 仙台は地代が高いイメージ、空いていても貸さない。→地主が感じているリスクあり。(家事・騒音等)
- ㉓ こういった場所提供については一瞬ではなく、継続性がないと意味がない。
- ㉔ 作る場所があり、さまざまなジャンルの方が集まる場所があることで、例えば音楽とアートといったつながりが生まれ、面白い活動につながっていくのでは。
- ㉕ 懇話会の資料を見ると、イベントが並んでいる印象。「育成」という言葉が少ない。作り手をどうやって育てるといふところがない。
- ㉖ 作り手はどうやって生まれてくるか。例えば音楽家(ことクラシックに関しては)大学から生まれてくる。演劇に関しては戯曲賞といった賞レースがあるが、アート、なかでも現代アートについては皆無。仕組みや制度を求めないと前に進めないのでは。
- ㉗ 本来、行政側は情報を知っているがプレイヤーにはなつてはいけない立場かと思うが、誰がキーマンなのかを分かっていないといけない。中の方が目利き力を持ってないといけないと思うが、今いないのではないか。
- ㉘ アーティストたちと知り合う機会が薄くなった。
- ㉙ 現場の苦労が無視されている印象がある。仙台は都市規模に対してそういった現場の声を聞く・語る場がない。
- ㉚ 震災後はメディアテークで様々な方の意見(地元・県外のプロの方々など)を聞き集約する場があったが、場所が継続せず無くなってしまい地元に残らなかった。
- ㉛ 東北大や宮城大等の大学の研究者との協働が少なすぎる。他の地域だと現代美術の場に大学関係者が来ていて、会話をしたり彼らの研究対象になったりしている。宮城県にも研究者はいるが、研究対象が宮城県外の印象。大学研究者たちの気持ちを惹きつける事業が行われていないということだろうか。
- ㉜ ルールを明文化せずいろいろな試せる施設・場がない。s m t等公共施設・貸館はルールが積み重なっているためできないので、民間がやるべきことかもしれないが、公共施設でもそういうことができるゆとりがあったら面白いと思う。
- ㉝ お金の問題なので、しっかりとしたアートの仕事がたくさんあれば、健全に運営できる。そういう仕事を生み出せる仕組みが重要。
- ㉞ 補助金を充てて事業しても、作品そのもののクオリティ向上には寄与しない。ちゃんとしたコンテスト→賞金といった仕組みも必要なのでは。
- ㉟ 市民側・行政側共に文化教養レベルが低い。子どものころに経験していない人は興味を持つことがない。興味があれば、文化芸術に対して市民が声を上げるはずだが、そういったものがないということは文化教養が醸成していない。
- ㊱ 仙台に文化芸術がなぜ必要なのかと問われたら、どう答えるのか？うわべだけの理念ではなく、生々しい内容や行政の課題でもいいと思うが、本音が大事。
- ㊲ お金と、専門性がある人がその能力を発揮することが重要。財団のartzカウンスル化によって独立した人事・予算が扱える権利を渡す仕組みがあれば、専門性のある人材がその分野で活躍でき、機動力のある組織が作れる。

【ヒアリング実施団体】

工学系 大学教員

【主なご意見】

- ①仙台市はコンパクトでいいのだが活動が見えにくい。いろいろな文化活動、音楽、演劇もそうだが、いろいろあるという割に、どこに行けばあるのかが見えにくい。知り合いから情報を得たり、コミュニティに属していれば情報は得られるだろうが、一般の方が自然に活動の情報を入手する機会が少ないのでは。
- ②s m tでも新浜のアートノード事業等いろいろしているが、情報の入手方法や、どれぐらいの広がり・深さでやっているのかなどが分かりづらい。自分で情報を取りにいかないと得られない。
- ③仙台市の事業は、まちを歩いていて自然に入ってくる情報が少なく、目にする機会が少ない。そのため、常連で成り立っている活動が多い印象。東京ではよく見かけると思うのだが。美術館等が多数あり、それらをまとめたサイトやチラシがたくさんあるからだろうか。各活動を見せる文化祭・見本市等が1年に1回くらいあれば、活動を多くの人に知ってもらいやすいのでは。
- ④そういった情報を届ける先の距離感と深さを考慮した広報。ビギナーには浅く広く、常連などには深く。活動に関わったことがない人たちも参加しやすいしくみづくり。
- ⑤仙台駅などにそういったPRの場があればよいのだが有料になってしまった。どこに広告を載せると効果的なのか、駅に限らず、有効な場所があると思うのだが。
- ⑥たまたまた人が活動に参加しようとする、すでにコミュニティが出来上がっていて、あとから来た人がどういう風にアプローチしたらいいかわかりにくい。
- ⑦文化活動等、普通の人からするとレベルが高すぎて入っていけない、敷居が高いと感じる。
- ⑧深い活動ができているというところが、ほかにはないs m tの重要なところ。
- ⑨s m tの中に、子供たちの書道や一般の方の展示がある等、色々な市民が活用していることが面白い。
- ⑩1階の展示の雑がみ部は入りやすくよかった。ガラスの部分を活用するのはいい。ショーウィンドウのように外から眺めている方もいた。目的がないと建物の上階に上がらない。1階入り口の広場をもっと活用しては。
- ⑪s m tだけではなくs m t+図書館、s m t+ギャラリー等、組み合わせて活用してほしいが、なかなか活用してもらえない。そういったモデルコース的なものがあるのもいいかもしれない。
- ⑫若い人がまちのなか含め、どういう風に資源を使うかをs m tから学べることがよいところ。アート、建築関係がまちのなかにあるということが大事で、都市と触れ合わないと建築はできない。
- ⑬若い時（中学生等）から素養があるというのが重要。
- ⑭夏休み終わりの9/1に毎年子どもの自殺者が多いそう。鎌倉での取り組みで、居場所が図書館にあるという呼びかけがあった。そういった面からアプローチしてs m tに子どもを呼び込んでもいい。
- ⑮呼び込むにしても、若い人は初めの入りは長文を読まない。Twitterのように140字のイン

パクトある文だとか、QRコードで読み込ませ、スマホで見られるようにしたり、空き時間でも見ることができるよう工夫するなどのやり方で集めてもよいかも。

- ⑩若い人が集まるような図書館の例。(須賀川の図書館 tette) 広々とした空間に、それぞれの居場所を見つけられる複合施設。ダンスホールの横に図書館がある。他の都市でも子供たち向けの染色ラボの近くにアートの本を置くなど、本と活動が隣にある。
- ⑪海外だと北欧、なかでもデンマークの図書館 Dokk1 は空間認知をコントロールするような建築、物の配置をしており、うろうろしているだけでいろいろな体験ができる仕組み。本、オーディオ、児童書やファミリーで遊べる空間や公演できる空間等がある。
- ⑫ s m t は仙台で一番有名な建物。これで人を呼んでいるという観光資源でもあるので建物を大事に。既存の建物をきちんと維持管理し、活用・充実させることも重要。
- ⑬定禅寺通に点在しているもの(改築後の市役所、中身が移転したあとの県民会館、s m t 等)を結ぶなにかがあれば、定禅寺通をめぐってもらえるのでは。そのときに一番目につくのは、民間・公共ともに建物の1階。
- ⑭仙台はゾーンがはっきり分かれており、意思をもって行かないとなかなかこの場所(定禅寺通)には来ない。車がメインという生活スタイルもあるが。
- ⑮海外の方には伊東豊雄氏の名前が有名なので、各方面の広報には名前を出したほうが集客できるのでは。
- ⑯若者がまちに行かない。行動範囲が狭く、仙台出身でも仙台のことを知らない子が多い。
- ⑰関東圏出身の学生たちにとっては自然のほうに目がいき、仙台の都市のほうには興味がない。
- ⑱学生で、居場所として s m t を使っていた子たちもいた。また、面白い大人(スタッフ)たちと出会える良い機会でもあった。仙台にはそういった多世代がミックスして出会う場が少ない。学生だけでなく、中年以上の大人でも、一人で行く場所が少ない。
- ⑲大人との接触の機会が少ない。個性的な大人がいることを知ることも学生にとって良い刺激となる。応援してくれる大人たちの中で育まれた個性的な学生たちが建築ダウンズ(東北大学大学院を卒業したメンバーで構成。展示デザインや什器設計・制作等で活動。)などになっていった。
- ⑳どういう方々が来館しているというのをみせてもいい。どこから何をしに来館された方だとかの分析をしたり、いろいろな市民が活動しているということを見せる等。
- ㉑学生をとどまらせるのは難しい。東北大卒者は圧倒的に東京に行く人が多い。(他の大学は逆に地元に残る学生もいると思うが)
- ㉒仙台には建築関係の企業が少ないため、若者が流出してしまう。
- ㉓Uターン等の人材は狙えると思う。そういった人たちは、学生時代に仙台でいい思い出があるからということが多い。逆に、若い時にまちで文化・アートなどの活動に親しんでいない人は簡単に外に出てしまう。学生時代の楽しみ方で変わってくる。
- ㉔関東等から人を呼んできて交流人口を増やす取組をしているところも。釜石では研修地として交流人口をふやしている。復興プロセスや、日本でも有名な建築家を集め、コンペを行い主要な建築物を多く建てた。まちの土木、安全性、都市計画、コンパクトシティ等のプロセスを含めて何を考えて行動していかなければならないか、これが企業の研修に合致し、リピーターも増えたそう。(かまいしDMC)
- ㉕単純に人口を増やすとなると、どこかの市町村との取り合いになってしまったり、田舎には大学がなかったりしてどうしても流出が避けられない。交流人口を増やすことで、そのなか

からこのまちが良いと思ってくれる人を呼び込む。

- ③② 仙台はいい意味でも悪い意味でも東京に近い。
- ③③ 遊びに来る若い人を増やすためにはもっと面白いことがないといけない。
- ③④ 仙台は、まちが面白くない。(1回来れば十分と思ってしまう。)
- ③⑤ 美術館等の展示が魅力的であったりすれば、また来ようと思ったりするかもしれないが、そういう展示がない。
- ③⑥ 仙台でなければできない活動のようなものをウリに出してもいいのでは。展示だと1回だけだが、何回も足を運ばないとできない何か。(石巻の森を作る活動。何度も足を運んで活動される方や、子ども・親子を巻き込んだ活動等で、リピーターや関わる人が徐々に多くなっていった活動。)
- ③⑦ 「義務感のない活動」でやりたいことをいつでも自由にできる、ゆるく人とつながれるというだけでも人を集めることができる。人と関わるもの、人と関わらなくてもいいものと、リピートにもいろいろ種類がある。
- ③⑧ 仙台で非日常のつながりをもって活動したい方を訴求させるとよいのでは。
- ③⑨ 定住せずともグルグルと回るような仕組みで、人が仙台を通過しないようにする。

震災復興過程における文化芸術活動を展開する団体へのヒアリング

震災復興過程における文化芸術活動を展開する団体のうち、以下の団体に対し、市の文化施策に求めることや、活動に際しての課題などについてヒアリングを行った。

【ヒアリング実施団体】

(公財)音楽の力による復興センター・東北

【主なご意見】

(活動の意義)

- ①復興コンサートを最初に開催したとき、コンサート前後で聴き手の様子のがらっと変わった。活動の意義は、参加することで分かる面も大きい。
- ②復興センターの活動は、経済活動から切り離されており、それに幸せを感じている。
復興センターで実施している事業は、ホールで開催されるような大人数が聴き手となるコンサートとは違い、“小さな空間で、あなたのために私が弾いている”ということが誰でも肌で感じることができる。音楽に限らないが、言葉を交わさずとも肌で文化芸術を感じることで、生きていることの実感も得られる。それは素晴らしいこと。
- ③震災後、虚無感でぼかんとしていた人たちが、生の音楽を初めて聴くことで、人として生きている感覚を取り戻したことがあったように、生きる根本として、行政も文化芸術を据えてほしい。
- ④復興センターの活動について、「音楽を届けに行きます」と端的に言ってしまうが、その一方で、音楽を介さないコミュニケーションも存在している。だからこそ、コロナ禍で一旦活動を中止した。
- ⑤活動を行う中では、仙台フィルの50年にわたる活動により蓄積された社会的信頼度の高さ

を感じた。フリーランスの方と事業実施で出向くにしても、事業説明で仙台フィルについて触れると、相手方の受けとめ方が全然違う。

- ⑥福島県で事業を実施した際、「せっかく来てくれたのだから、お返しに」ということで、事業実施先の方々が虎舞を披露してくださり、演奏家と地域の方々が打ち解けていく様子を垣間見たことがあった。復興センターとしては、そこまでが事業実施のなかで届きたいもの。
- ⑦事業実施をすること＝喜んでもらえる、という思い込みは怖い。
- ⑧他の団体と違うのは、基本的にはこちらから押しかけていかないというスタンスであること。あくまで、地域からの要望の声があったときに行く。そこまで待てるという経済的基盤。無理に押しかけずとも、活動基盤を存続できるという経済的基盤があったからこそ、このスタンスを保つことができた。この基盤を、どのように担保していくかが重要であると考えている。(アウトリーチは税金の還元でもあるが、仙台市がどこまで経済的基盤を被るのか、ということでもある。)
- ⑨音楽を聴くことで、現実から離れる時間をもつことができる。亡くなった人との思い出、地域共有の思い出の曲があったりする。
- ⑩みんなで歌うことで心身へ良い影響を与えることがある。
- ⑪音楽にだけ詳しいことよりも、地域がどういう実情であるのか知っていることが大切。

(今後の展望)

- ①厄災にあった方、高齢者、障害者、子ども達、あらゆる弱者に対して広く事業実施ができるようになることよい。
- ②仙台はフリーランスの音楽家がいる前提で動けるが、東北の他県にはフリーランスの音楽家がいなかったり、仕事がなく生活ができない現状もある。仙台フィル団員からお弟子さんを紹介されることもある。活動経験の少ない演奏家に、演奏の場を与えること、人材ストックという視点も大事。
- ③最近では寄附金がほとんどない。自主財源がどんどん出ていく一方。補助事業であっても、補助率が下げられている現実がある。このようななかで、どのように財団を存続させていくのかを日々模索している。

(コーディネーターの重要性)

- ①コーディネーターは「予算確保から事務・経理まですべてを含めたプロフェッショナル」として見てもらわないと、その重要性が伝わらない。学芸員とは異なる。
- ②アーティストはアーティスト活動に専念すべきであると考えている。求められることが違うため。とはいえコーディネーターも、経理のことは分からないので、システムとして機能するものが構築できるとよい。
- ③いきなり芸術家が現地に赴くのはいろんな意味で危ないことでもあるため、コーディネーターがつなぎとして存在することには意義がある。
- ④音楽家と地域の町内会をつなぐ“翻訳者”であると思っている。翻訳者であり、ツアーコンダクターであり、保健師、衛生士、たまに役者のような役割も担うことがある。
- ⑤「会場を暖める」ということ一つとっても、地域の方が考える「暖める」と演奏家が考える「暖める」にはずれが生じる。演奏者も、聴く側も、集中できる環境を作るのがコーディネーターには求められている。

(担い手育成のために求められる市の役割)

- ①担い手は座学では育成できない。行政ができるのは、いかに現場の数をつくるか。
- ②AEDの使い方、目の見えない方のアテンドの仕方、救命講義、認知症の方のケア等、学べる場を作っていたきたい。
- ③音楽だけの知識だけでは務まらないことに気づいた。音楽以外の知識を学ぶ場所が必要。自治体によって、地域に対してどこのセクションが密接なのか異なるため、そのような知識も必要である。
- ④コーディネーターの経済的な待遇はよいものとは言えない。若者に対し、いつまで存続するか分からない団体と一緒に働こう、と誘うことはできない。

(その他・市の文化施策に関する意見・要望)

- ①現在計画を策定中とのことであるが、これまで外向けに公表している指針等はなく、何に基づいて文化事業を行っていくべきなのか、疑問に思うことがあった。ただ理念を示すだけであるとか、綺麗事を並べるものだけの計画にはしないほしい。
- ②仙台ジュニアオーケストラは、オーケストラには教育する力がありますという強みを打ち出していた。文化振興以外の多義的な要素がある。文化政策を考えるときには、単なる文化振興をうたうのではなく、他分野への波及効果も足していくべきである。
- ③「平時」「非常時」の考え方についても念頭に置いておくべきである。
- ④従来のような「こういうイベントがあるから参加したい人は参加してください」というスタンスではなく、仙台市側から、必要とする人に出向いていく事業が増えていくとよい。
- ⑤劇場に足を運んで触れる芸術も大事だが、そのような場所に足を運べない方も多い現状がある。仙台市内でも地域によっては小学生等、文化芸術に触れずに成長していく子供達が一定数いるという現実を目の当たりにしてきた。こちらから出向いて文化芸術を届ける姿勢を持っていただきたい。
- ⑥「東北」という視点も計画に入れるのがよいのでは。東北における仙台の役割の認識を。
- ⑦演奏家資源は、東北の中で仙台が突出している。都市仙台があり、交通網があることで、仙台を拠点に東北各地で活動ができている。
- ⑧東北のアーティストは、「ともに震災を経験していた」ことも、被災者にとっては大きなこと。被害の大小はあるにしても、震災経験者として、気持ちを共有できることは大きい。
- ⑨「レジリエンス(回復力)」という言葉を紹介する。元国連事務総長 潘基文氏、九州大の中村氏もこの言葉を使っている。震災等の非常時にあった際、最終的にいかに素早く回復していくか、音楽そのものの力ではなく、(音楽を介した)人の力である、と結論づけている。
- ⑩災害を経験した仙台ならではの計画を策定してほしい。「レジリエンス(回復力)」を、どのように平時に作るのか、ご検討いただきたい。
- ⑪青葉山エリア複合施設整備室が立ち上がった(現)段階で、アウトリーチ活動を始めたかどうか。アウトリーチ活動は、音楽ホールが開館したらこんなことができる、という広報にもなる。アリオスでは、開館前からアウトリーチ事業を行っていた。ホールに行ける人だけのためのホールではなく、アウトリーチ事業を打ち出していければよいのではないか。
- ⑫「あらゆる人に開かれたー」とした場合、たとえばホームレスの方や、病気等により大きな音を出してしまう人、騒いでしまう人が来た場合に、どのように対応するのか。静かに芸術

を味わいたい人と共存できるのか、考えていただきたい。本当の意味で、あらゆる人に開く覚悟があるのか。

- ⑬複合施設整備にあたっては、親子、高齢者が相談できる場があるとよい。芸術に直接的な関わりがあるのではないが、このまちで人が暮らすことを考えたときに、相談窓口があると、ホールに足を運びやすい。
- ⑭シティセールスとしては、新しいホールを作り、オペラを上演できるような大きな舞台をつくるのが目を引くのかもかもしれないが、アウトリーチを100回でも200回でも、市民に芸術を提供していく、そのような活動体があってほしいと感じている。ハコモノと言われるのは、貸館的側面が大きいから。活動体として動いていれば、必ず人は往来する。